

I. 諸因子の胎児に及ぼす影響に関する研究

分担研究報告書

奈良医科大学

條 元 彦

A. 周産期感染症に関する研究

最近の産科管理は早産超未熟児・極小未熟児などを対象として専門的に管理する新生児集中治療室(NICU)の活動にもとづき著しく向上したが、このNICU技術において依然難問とされるのが対感染症処置である。これら在胎期間が短い児の免疫機能を詳細に検討すると、母体より経胎盤的に胎児に移行するIgG抗体は少量であり、他方、自己の産生するIgM抗体も極く少量であった。後者はBCDF産生能の低下に起因するものと考えられた。したがって超未熟児・極小未熟児の管理には受動免疫などの方策を講ずる必要があると思われる。

新生児ヘルペス症の発症を全国2,000の医療機関で調査したところ年々発症増加の傾向があることが知られた。このさい注目すべき点は母体性器にヘルペス症病変の認識を欠くにもかかわらず、その児にヘルペス症が見られる例が多いことである。したがって母体性器ヘルペス症の診断には血清IgG, IgM, IgAなどの検出が重要な課題となるが、種々検討の結果IgA特異抗体を検出する試みが比較的有效であると考えられた。

最近増加しつつある妊婦のクラミジア感染は東京都内484例の妊婦検査中4.3%に認められた。本症と流産・子宮内胎児死亡との相関は今後の継続検討にまつが、このような例ではIgA, IgG抗体が若干高い中間成績を得た。

B. 各種薬剤の児に及ぼす影響に関する研究

昭和61年9月～11月を調査期間とし、30施設における連続100妊婦(分娩終了者)の妊娠期間中の薬剤使用実態を調査したところ、現在までに2331症例の報告を集積することが出来た。症例中には貧血202例(8.7%)、妊娠中毒症108例(4.6%)、前・早期破水67例(2.9%)、感染症49例(2.1%)、切迫早産39例(1.7%)などが含まれており、多種類の薬物が使用されていた。寄形児発生は55例(2.35%)であった。これらの症例における使用薬剤と胎児・新生児異常との間に如何なる相関が有るかは今後の解析により明らかにしたい。

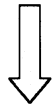
ラットを用いた実験で、妊娠早期の高血糖は胎仔骨格系の異常を発生し易い点が示唆された。またヒト糖尿病合併妊婦では切迫流早産時に用いる β_2 -stimulantがインスリン必要量を増量させることが明らかとなり、糖尿病と切迫流早産の合併する妊婦においては、この点に対する留意が求められる。

無痛分娩の実施要領についてのアンケート調査を昭和61年9月より62年2月の期間、国内503施設、

国外 250 施設、国外 250 施設を対象として行い、それぞれ 61%、57% の回答を得た。それによるとマ
ーカイン、カルボカイン、キシロカイン、ジアゼパム、ペチロルファン、ラボナ、笑気などが繁用さ
れていた。国内、国外の薬剤選択には若干相違があり、その理由等に関して目下検討中である。

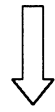
C. 嗜好品等の児に及ぼす影響に関する研究

特に受動喫煙の有害性について検討を加えた。その結果、母体受動喫煙のパラメーターとしては母
体尿中コチニンが最も有効であり、その濃度は児の発育と相関することが示された。すなわち受動喫
煙の程度を母体尿中のコチニン濃度で測定し、ある一定濃度を超える場合、胎児発育障害が生ずるこ
とを警告する新しい胎児管理法が可能となった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 諸因子の胎児に及ぼす影響に関する研究

分担研究報告書

奈良医科大学

一條元彦

A. 周産期感染症に関する研究

最近の産科管理は早産超未熟児・極小未熟児などを対象として専門的に管理する新生児集中治療室(NICU)の活動にもとづき著しく向上したが、このNICU技術において依然難問とされるのが対感染症処置である。これらに在胎期間が短い児の免疫機能を詳細に検討すると、母体より経胎盤的に胎児に移行するIgG抗体は少量であり、他方、自己の産生するIgM抗体も極く少量であった。後者はBCDF産生能の低下に起因するものと考えられた。したがって超未熟児・極小未熟児の管理には受動免疫などの方策を講ずる必要があると思われる。新生児ヘルペス症の発症を全国2,000の医療機関で調査したところ年々発症増加の傾向があることが知られた。このさい注目すべき点は母体性器にヘルペス症病変の認識を欠くにもかかわらず、その児にヘルペス症が見られる例が多いことである。したがって母体性器ヘルペス症の診断には血清IgG, IgM, IgAなどの検出が重要な課題となるが種々検討の結果IgA特異抗体を検出する試みが比較的有用であると考えられた。

最近増加しつつある妊婦のクラミジア感染は東京都内484例の妊婦検査中4・3%に認められた。本症と流産・子宮内胎児死亡との相関は今後の継続検討にまつがこのような例ではIgA, IgG抗体が若干高い中間成績を得た。

B. 各種薬剤の児に及ぼす影響に関する研究

昭和61年9月～11月を調査期間とし、30施設における連続100妊婦(分娩終了者)の妊娠期間中の薬剤使用実態を調査したところ、現在までに2331症例の報告を集積することが出来た。症例中には貧血202例(8.7%)、妊娠中毒症108例(4.6%)、前・早期破水67例(2.9%)、感染症49例(2.1%)、切迫早産39例(1.7%)などが含まれており、多種類の薬物が使用されていた。寄形児発生は55例(2.35%)であった。これらの症例における使用薬剤と胎児・新生児異常との間に如何なる相関が有るかは今後の解析により明らかにしたい。

ラットを用いた実験で、妊娠早期の高血糖は胎仔骨格系の異常を発生し易い点が示唆された。またヒト糖尿病合併妊婦では切迫流早産時に用いる2-stimulantがインスリン必要量を増量させることが明らかとなり切迫流早産の合併する妊婦においては、この点に対する留意が求められる。

無痛分娩の実施要領についてのアンケート調査を昭和61年9月より62年2月の期間、国内503施設、国外250施設、国外250施設を対象として行い、それぞれ61%、57%の回答を得た。

それによるとマーカイン,カルボカイン,キシロカイン,ジアゼパム,ペチロルファン,ラボナ,笑気などが繁用されていた。国内,国外の薬剤選択には若干相違があり,その理由等に関して目下検討中である。

C. 嗜好品等の児に及ぼす影響に関する研究

特に受動喫煙の有害性について検討を加えた。その結果,母体受動喫煙のパラメーターとしては母体尿中コチニンが最も有効であり,その濃度は児の発育と相関することが示された。すなわち受動喫煙の程度を母体尿中のコチニン濃度で測定し,ある一定濃度を超える場合,胎児発育障害が生ずることを警告する新しい胎児管理法が可能となった。